

[要旨]

ヘーゲル『精神現象学』「Ⅰ 感覺的確信」における 指摘 Aufzeigen の問題

上田 尚徳

「Ⅰ 感覺的確信」の結論の一つである「個別的なものは普遍的なものに媒介されている」という議論は、『精神現象学』において「主人と奴隷の弁証法」に次いで人口に膾炙した議論であろう。とはいえ、このことはその具体的な内実が十分に検討されてきたことを意味してはいない。とりわけ、「Ⅰ 感覺的確信」の議論は大きくは「言語」と「指摘」の問題とに区分されうるが、注目されてきたのは常に「言語」であり、「指摘」の問題は等閑視されてきた。

たしかに、「言語」の問題ばかりに議論が割かれてきたことは故なきことではない。というのも、「言語」の議論も「指摘」の議論も「個別的なものは普遍的なものに媒介されている」という同じ結論を導き出すからだ。とはいえ、言語の問題に感覺的確信の議論を還元してしまうことはこの二つの議論がその論理構造をも同じくするときのみ許容される。しかし、本当に二つは同じ議論なのだろうか。私たちは「指摘」の議論において独自の論理構成を見出すことになるだろう。

このことを提示することによって、「指摘」という議論が言語の問題よりも一層強い意味での實在論の否定と観念論の主張を行うものであるということが明らかとなる。対象が認識されるのはその対象がただ実在しているからではなく、意識によって指摘するという対象化する作用によって可能となっているという意味で、「指摘」とは意識の観念論的側面を提示しているのである。この論理展開を十全に理解することによってのみ、ヘーゲルが提示しようとする観念論的立場を明確に理解することが可能となる。本稿ではこのような「指摘」の問題に焦点を当て、「言語」の問題だけでは汲みつくされない感覺的確信の議論の意義を提示する。これにより、従来問題とされてきた「Ⅰ 感覺的確信」から「Ⅱ 知覚」への移行とヘーゲルの観念論が明らかにされるであろう。